

目次

序文

I プロジェクトの概要	1
1. 事業の目的・目標	2
2. 活動組織	3
3. 弘前大学における被ばく医療体制	4
4. プロジェクト年度計画（平成 25 年度～平成 29 年度）.....	5
5. 平成 27 年度事業目標・計画	6
II 各部門の活動報告	7
1. プロジェクト推進本部	8
1) 活動目標と計画	8
2) 活動の概要	8
3) 広報担当者会議	8
4) 福島県浪江町復興支援プロジェクト WG	19
2. 継続事業強化・推進部門	21
1) 緊急被ばく医療人材育成プロジェクト現職者研修	21
2) 青森県原子力防災訓練参加	31
3) 福島災害医療セミナー in 弘前 2015 開催	34
4) その他の研修等参加	39
5) まとめ	42
3. 高度実践看護教育部門	44
1) 活動目標と計画	44
2) 実施内容	45
(1) 「放射線看護」分野の特定に向けて	45
(2) 放射線看護高度看護実践コース.....	49
(3) ICRR 弘前サテライトミーティング放射線看護シンポジウム	57
(4) 高度実践看護教育部門セミナー.....	59
(5) 日本看護研究学会特別交流集会.....	62
(6) 東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科共同災害看護学専攻との連携.....	64
(7) 弘前大学大学院保健学研究科被ばく医療・放射線看護人材バンク.....	65
(8) 「放射線看護」専攻教育課程特定記念式典・記念講演	66
3) 総括と今後の展望	67
4. 放射線リスクコミュニケーション部門	68
1) 活動目標と計画	68
2) 実践内容	68
(1) 学部教育、リカレント教育の教材開発および教育評価.....	68
(2) 放射線リスクコミュニケーション演習の教材開発.....	72
(3) 対象フィールドへの放射線リスクコミュニケーション教育.....	73
(4) 一般への啓蒙・啓発.....	77
3) 総括と今後の課題	78

5. グローバル人材育成部門	81
1) 活動目標と計画	81
2) 実施内容	81
(1) グローバル・リトリートに向けた取組み	81
(2) 修士・博士課程の学生の国際学会等への参加を支援	96
(3) 教育・研究者交流の実施	96
(4) KIRAMS 防災訓練への参加と KIRAMS 視察	97
(5) 東南アジアからの短期被ばく医療研修の受け入れを検討	101
3) 総括と今後の課題	126
Ⅲ 専門家委員会による外部評価	129
1. 年度末活動評価 ― プロジェクトの外部評価として ―	130
1) 各部門の活動報告に対する講評	131
2) 各委員からの総評	134
3) 活動に対する総括的な提言	135
Ⅳ 活動総括	137
1. 全体総括及び次年度への課題	138
1) 全体総括	138
2) 今後の課題	139
資料編	141
・ 委員会要項	142
・ 関連規程	144
・ 委員会記録	146

序 文

本プロジェクトは、平成 20 年度から平成 24 年度に実施した文部科学省特別教育研究事業「緊急被ばく医療人材育成の体制整備」の後に、平成 25 年度からの 5 年間の事業として計画された「緊急被ばく医療の教育・研究体制の高度化及び実践プログラムの開発－高度実践被ばく医療人材育成グローバル拠点の形成－」を継続実施したものである。

この間には、東日本大震災による原子力発電所事故が発生し、その影響の大きさについては、多くの方が強く記憶されているものと思われる。

保健学研究科では、被ばく医療に対応できる高度で実践的な知識・技術をもつ人材を養成するために、前プロジェクトを基盤として、より高度な教育・研究体制を整備・構築することを目指して取り組んできている。本事業活動は 3 年目に入り、その活動の主体は、4 部門構成で行っている。学部・大学院教育、現職者教育の推進を担っている継続事業強化・推進部門、博士前期課程に放射線看護高度看護実践コースの設置を目指している高度実践看護教育部門、放射線リスクコミュニケーション教育の底辺拡大等を図っている放射線リスクコミュニケーション部門、若手教員や学生等を通じた国際交流や連携体制づくりのための人材育成を支援しているグローバル人材育成部門、などがそれぞれの目標に向けて活動している。

一方、放射線医学総合研究所をはじめとする多くの関係機関や本学医学研究科、附属病院、被ばく医療総合研究所等、学内外の多くの機関・施設、また専門家委員の先生をはじめ多くの方々のご指導やご支援、ご協力を頂きながら本事業を行ってきており、ここに改めてお礼を申し上げます。

本報告書は、平成 27 年度に保健学研究科が取り組んだ活動内容とその成果を報告する。当初 5 年計画で開始された事業であるが、本年度をもって事業が終了することになり、今後の展望を含めた内容が一部含まれることをご了承頂きたい。

平成 28 年 5 月

保健学研究科長 木田 和幸

I プロジェクトの概要

I プロジェクトの概要

1. 事業の目的・目標

<目 的>

東日本大震災以後に顕在化した緊急被ばく医療人材育成の重要性と、弘前大学が進めてきた被ばく医療教育研究体制を基盤として、今後の緊急被ばく医療に対応できる医療者及び放射線リスクコミュニケーションを行える人材の確保とその充足を行うとともに、より高度で実践的な緊急被ばく医療人材育成プログラムを開発し、放射線被ばくや放射線防護に関して高度な看護実践をおこなえる看護師の養成を視野に入れた”グローバル”な被ばく医療人材育成の拠点を形成する。

<必要性・重要性>

東京電力福島第一原子力発電所事故を発端として、これまでの想定範囲を超える様々な課題が顕在化した。特に、大規模放射線災害発生時における避難住民の不安への対応を含め、より高度で専門的な判断力と実践力を備え、総括的に問題解決できる被ばく医療の専門家や放射線リスクコミュニケーションを担う人材は不可欠であり、実践的な状況対応できる緊急被ばく医療人材育成プログラムの見直し・高度化が必要となっている。

<取組内容の概要>

国内外との関係機関との協力・連携のもと、「被ばく医療人材の高度専門化」と「放射線基礎教育の充実と底辺拡大」を柱とした教育プログラムを開発する。具体的には、国際標準に準拠した高度実践看護師制度や日本看護協会が認定する専門看護師を視野に入れた被ばく医療人材育成の拠点を形成し、新たに高度で実践的な大学院教育プログラムを構築する。また、学校教員及び教職選択学生に対する放射線リスクコミュニケーション教育を行うことで、放射線基礎教育の充実と底辺拡大を図る。さらに、被ばく医療においては長期的な健康管理が必要となることもあることから、放射能拡散地域の環境影響調査や生物学的影響調査・研究を行い、その結果を教育へ還元するとともに、必要な際には地域あるいは地域住民へ報告を行う。

<期待される効果>

緊急被ばく医療体制の高度化とともに、人材育成の国際拠点の形成が図られ、放射線のケアやリスクコミュニケーションに優れた人材が輩出される。

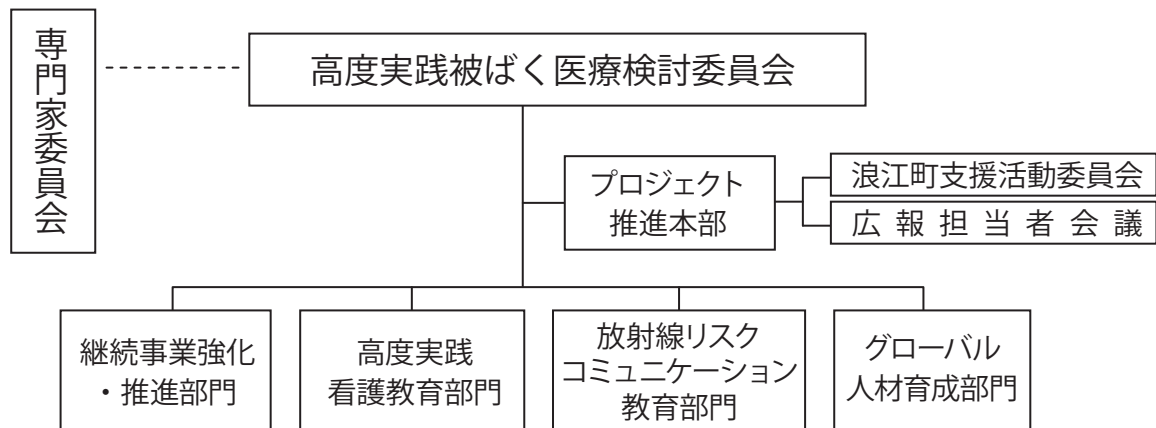
<プロジェクト目標>

- 前プロジェクト 5 年間の成果を基に、課題の克服と改善を図り、学部教育、大学院教育、現職者教育を継続し、恒常的な被ばく医療人材育成に努める。
- 大学院教育の中に、より高度で実践的な緊急被ばく医療人材育成プログラムを開発し、放射線被ばくや放射線防護に関して被ばく医療のリーダーとなって高度な看護実践を行える

看護師を養成する。

- 教員養成課程学生を対象とした学部教育ならびに学校教員向けのリカレント教育の中で、放射線リスクコミュニケーションを取り入れた教育プログラムを開発・実施し、社会における放射線リスクコミュニケーションを受け入れる人材の拡大を図る。
- 蓄積された被ばく医療人材育成の成果を国際的に発信するとともに、留学生の受け入れを中心として、アジア諸国での被ばく医療人材育成の支援を行う国際拠点形成を図る。

2. 活動組織



<各部門のミッション>

● プロジェクト推進本部：

プロジェクト全般にわたる管理・運営の司令塔として部門間の共通課題解決に向けた準備・調整を行うとともに、対外的窓口として渉外・広報・啓発活動を展開する。また、前プロジェクトで芽生えた、被ばく看護や放射線の生体影響に関する学術研究、ならびに被ばく医療の人材育成を対象とした研究を発展・推進させる。

● 浪江町支援活動委員会：

弘前大学が取り組む浪江町支援プロジェクトの構成員として、浪江町住民の健康支援活動の一端を担う。

● 継続事業強化・推進部門：

前プロジェクトからの継続事業である学部・大学院・現職者教育の継続と見直し改善を行う。

● 高度実践看護教育部門：

大学院博士前期課程に放射線看護高度看護実践コースを設置することを目的とした人材育成計画を、教育課程の編成・実施・評価という PDCA サイクルのプロセスに則り推進する。

● **放射線リスクコミュニケーション教育部門：**

地域住民を対象とした放射線リスクコミュニケーションの考え方や、小中学校の教員となる学生やリカレント教育の一部として現職教員を対象とした放射線リスクコミュニケーション教育を実施する。

● **グローバル人材育成部門：**

国内外の被ばく医療関連機関との人事交流、学術交流を積極的に進めることで、保健学研究科の教員の国際性を涵養するとともに、大学院へ外国人留学生の入学を推進し、緊急被ばく医療に関して近隣諸国との連携を強化する。

● **保健学研究科高度実践被ばく医療専門家委員会：**

国内の有識者により構成した委員により、本プロジェクトの運営・進行状況に対する専門的な助言・指導ならびに外部評価を行う。

3. 弘前大学における被ばく医療体制

弘前大学放射線安全機構（以下の事項の意思決定機関）

- ▶ 緊急被ばくに関する医療，教育，研究その他の方針，実施体制に関すること。
- ▶ 放射線の安全管理体制に関すること。
- ▶ 被ばく事案が発生した場合の対策及び患者受け入れに関すること。
- ▶ 被ばく事案が発生した場合の状況調査等に関すること。
- ▶ 緊急被ばく医療に関する人材の育成に関すること。

4. プロジェクト年度計画（平成 25 年度～平成 29 年度）

■ 平成 25 年度

- 大学院教育プログラムの検討開始（遠隔教育・e-learning の整備）（長崎大・鹿児島大との連携）
- 学部教育プログラムの検討開始
- リカレント教育プログラムの検討開始（青森県との連携について協議）
- 大学院教育のための国内外でのスタッフ研修計画立案（放医研、SPRA、UCSF、ストックホルム大学）
- リスクコミュニケーション教育のための国内外でのスタッフ研修計画立案（放医研・REAC/TS、SPRA）

■ 平成 26 年度

- 大学院教育プログラムの構築（遠隔教育・e-learning の整備）（長崎大・鹿児島大との連携）
- 学部教育プログラムの構築
- リカレント教育プログラムの構築（青森県との機能的連携強化）
- 大学院教育のための国内外でのスタッフ研修開始（放医研、SPRA、UCSF、ストックホルム大学）
- リスクコミュニケーション教育のための国内外でのスタッフ研修開始（放医研・REAC/TS、SPRA）

■ 平成 27 年度

- 大学院教育プログラムの中で放射線看護高度看護実践看護師教育の開始
- アジアからの留学生受け入れ準備
- 学部教育プログラムとして教員養成課程学生への放射線リスクコミュニケーションに関する教育の開始
- リカレント教育プログラムとして学校教員への放射線リスクコミュニケーションに関する教育の開始
- 大学院教育のための国内外でのスタッフ研修継続（放医研、SPRA、UCSF、ストックホルム大学）
- リスクコミュニケーション教育のための国内外でのスタッフ研修継続（放医研・REAC/TS、SPRA）

■ 平成 28 年度

- 大学院教育プログラムの中で放射線看護高度実践看護師教育の継続・軌道修正（長期履修含む）
- アジアからの留学生受け入れ調整
- 学部教育プログラムとして教員養成課程学生への放射線リスクコミュニケーションに関する教育の継続・軌道修正

- リカレント教育プログラムとして学校教員への放射線リスクコミュニケーションに関する教育の継続・軌道修正
- 大学院教育のための国内外でのスタッフ研修継続（放医研、SPRA、UCSF、ストックホルム大学）
- リスクコミュニケーション教育のための国内外でのスタッフ研修継続（放医研・REAC/TS、SPRA）

■ 平成 29 年度

- 大学院教育プログラムの中で放射線看護高度実践看護師教育の継続・評価（長期履修含む）
- アジアからの留学生受け入れ開始
- 学部教育プログラムとして教員養成課程学生への放射線リスクコミュニケーションに関する教育の継続・軌道評価
- リカレント教育プログラムとして学校教員への放射線リスクコミュニケーションに関する教育の継続・軌道評価
- 大学院教育のための国内外でのスタッフ研修評価（放医研、SPRA、UCSF、ストックホルム大学）
- リスクコミュニケーション教育のための国内外でのスタッフ研修継続・評価（放医研・REAC/TS、SPRA）

5. 平成 27 年度事業目標・計画

- PDCA サイクルに沿った継続事業の展開
- 高度実践看護教育の大学院教育の開始
- 教員養成課程学生および教員への放射線リスクコミュニケーション教育の開始とスタッフ研修の実施
- グローバル人材育成に向けた国内外の若手研究者の交流ネットワークの展開・拡張
- 被ばく医療教育方法の改善に向けた環境整備
 - － e－ラーニング・遠隔授業・シミュレーション教育－